



# 2016

# 国語

## 注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は ㊦ から ㊧ まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「あたし」（吉田セナ）は走るのが大好きな小学五年生。同学年の「一ノ瀬さん」は自分の中のライバルで、地域のスポーツクラブAC宮の坂」に所属している。「あたし」は大好きな陸上部の顧問、坂上先生に、正しいフォームを教わり、早く走れるようになった。しかし七月に出場した競技会では、緊張しすぎて思うような結果が出せなかった。「リラックスして走れたら、もっといいタイムが出る」と坂上先生に言われ、十月の競技会では失敗しないよう決意をする。

「先生は幅跳びを見てくるから、あと二本ずつ走っててね」

「はい」

みんな、そう返事したくせに、坂上先生が砂場に行ってしまうと、いきなり六年生たちが A 話をはじめた。

「なあ、どこにするか、もう決めた？」「たぶん、バスケ。体育館の方がラクだし」「うん、言ってるよな」

ん？ なんの話？

もつと聞こうと近づいたら目が合って、「五年から走れ」と命令された。

ハイ、ハイ、走りますよーだった！ ① いつもこうだ。

陸上部の六年生はほとんどが〈AC宮の坂〉の陸上部にも入ってて、だからやつらはいつも態度がデカイ。なにかといばる。すぐに、「ACCじゃ、こんなちよろい練習しないよな」とか言って、学校の陸上部をバカにする。だったら、やめりゃあいいのにさ。

六年生が走らないから、あたしは小川さんとふたりで四本も走った。小川さんはACCに入ってるけど、感じ悪いことを言ったりしない、おとなしい子なんだ。五本目を走るぞってとき、坂上先生がもどってきて、集合の笛が鳴った。

また輪になって、全員でクーリングダウン。なんかいつもより早めのおわりだな、と思っていたら、最後に坂上先生が「話があるから集まって」と、みんなをすわらせた。

坂上先生は、② すこしこまったような顔で「ええと」と言って、話しだした。

「もう知っている人もいますけど、陸上部は解散することになりました」

は？ カイサン？

「どういうことですか？」

口をぽかーんと開けてるだけのあたしのかわりに、前にすわっていた宮本くんが質問してくれた。宮本くんの背中には、砂がパイナップルみたいな形でついている。あたしはそれをみつめたまま、まだ B していた。

「ほんとうにみんなには申し訳ないんだけど、<sup>③</sup>陸上部をつづけられなくなったの。いろんなことが重なっちゃってね」  
つづけられない？ いろんなこと？

頭のなかがぐによつとなった感じで、なんだかちやんと考えられない。

「先生は、もうすぐ産休とって、学校をお休みすることになります。赤ちゃんが生まれるからね」

坂上先生はおなかに両手をあてて、すこしだけにつこりした。

「そのあとも、しばらくお休みするので、陸上部を指導する先生がいなくなる。これがまずひとつね。それから、いま、運動場がこんなでしょ。また、前みたいなあぶないことがあったらたいへんだし」

ああ、七月の練習のときのことか。幅跳びの助走に入った佐々木くんと、ボールを追いかけてきたサッカー部の男子がぶつかったんだよね。どっちも、そんなひどい怪我<sup>けが</sup>はしなかったけど、サッカー部の顧問の南先生が、坂上先生に C 怒<sup>おこ</sup>ってたっけ。

「それで、もともと人数がすくなめだった陸上部を、ほかの部にふりわけたらどうかっていう意見が、先生たちのあいだで出たの。これがふたつ目」

「で、先生がぼくたち六年にきいてきたってわけ」

さっきバスケ部に移るって言ってたやつが、あたしや宮本くんを見て D した。

「そうなの。六年生にきいたら、ほかの部に移ってもかまわないって言うてくれたのね。それで、先生たちの話し合いで、陸上部は解散にしましょう、ということになりました。残念だけど」

なに、それ？ なんかへんだよ、そんなの。

<sup>④</sup>口のまわりがムズムズする。

「運動場は来年の三月にはもとどおりになるから、来年の一学期からは陸上部も復活よ。そのときは、いまの五年生はぜひ、もどってきてく

「ださい」

「そんなの、へんだ！」

わっ。また口が勝手に動いてた。

「吉田さん？」「どうして、五年の意見はきいてくれないんですか。六年にだけきくのは、へんです」

「うるせーんだよ」

さっきのバスケ部男が怒鳴った。

「五年なんて四人しかいないんだから、だまつてろ。多数決だよ、多数決！」「五年にないしよで決めるなんて、多数決じゃないよ」「ACの

メンバーでもないやつが、でしゃばるなつづの」「いま、ACのことなんか関係ないでしょ。バツカじゃないの」「バカはそつち——」

「ふたりともやめなさい！」

坂上先生が、こわい顔で E 言った。でも、またすぐにこまった顔になった。

「吉田さんの言うとおり、五年生にもちゃんときくべきだったわよね。ごめんね、勝手に決めて。でも、もう決まってしまったから……」

だから、なに？

なんて言ったらいいかわからなくなつてだまつたら、坂上先生が「ごめんなさい」と頭をさげた。それから、「好きなクラブに移つていいので」とか説明しはじめたけど、ちゃんと聞こえてこなかった。耳にわたがつまつてるみたいで。

ほかのクラブに移らないといけないなんて……。どうしよう。バスケ部？ たしか、一ノ瀬さんはバスケ部だったよね。学校のクラブは陸上じゃないのがいいって。陸上の練習はACでするからつて。でも、じゃあ、あたしはどこで陸上の練習すればいいの？ 十月には競技会があるのに。えっ、競技会？

「せ、先生、競技会はどうなるの？」

わっ、あたし、立ちあがつてしまつていた。

「今度の競技会は、個人では参加できないの。どこかの団体に所属してないと。だから、もし吉田さんがどうしても参加したいんだったら、AC宮の坂に途中入部できるように、先生からのんでみるわ」

「いまごろからむりだつて。入部テストに合格するわけないし」

バスケ部男がまたしてもニヤニヤわらいながら、エラーソーに言った。

「むりじゃないわ。吉田さんなら、ACでやっていく力はあると思う。だから——」

ここでまた、<sup>⑤</sup>あたしの耳にわたがつまった。力がぬけて、へなへなぺたり、とすわりこんだ。

十月の競技会は自分の力を出しきろう、って言ったの、坂上先生じゃない。こんなの、ひどいよ。

ACに入らないとダメなんだ。お母さんはなんて言うかな。入部テストって、どんなだろう。

ああ、どうしよう——

気がついたら、そばには宮本くと佐々木くんしかいなかった。

「あれっ、みんなは？」「今日はもう解散、っていうか、これで陸上部は解散だって。吉田さん、ちゃんと聞いてなかったでしょ。明日までに、移りたい部を言いきなさいだつてさ」

宮本くんもつまらなさそうな顔をしている。

「へんだよね、先生と六年生だけで勝手に決めちゃって。ねえ、宮本くんたちはACに入るの？」「うちはむり」

宮本くんが、すぱん、と答えた。

「ユニフォーム買ったたり、スパイク買ったたり、いろいろお金がかかるみたいだし、それに親も手伝いにいかないダメらしいよ。うちは共働きたし、むり、むり」

ふうん、やっぱりお金がかかるんだ。じゃあ、うちもむりだ。お母さんはいつも「お金がない」って言ってるもん。

「佐々木くんは？」「だめ、だめ。ACに入りたいなんて言ったら、それよか塾じゅくに行け、って怒鳴られるだけだよ。いま塾、塾、ってうるさいんだ。吉田さんはどうすんの？」「ACなんか行けないよ、うち、ビンボーだし。あーあ。あたしたち、競技会に出られないんだ」

「五年生は来年があるからがまんしろ、って感じだったよな」

宮本くんは「ちえっ」と小さく言って、つま先で地面をけりつけた。

「へんだよね。こんなの、ぜったいへんだよね」

あたし、走りたいのに。バスケやサッカーじゃなくて、走りがしたいのに。ACに入っても、五年生でも、十月の競技会に出たいのに。おかしいよ、こんなの！

<sup>⑥</sup>からだのなかで、なにかが爆発した。大きな力で上からぐわつと引っぱりあげられたみたいに、あたしは、すくり、と立ちあがっていた。

ダツと走りだしたら、宮本さんと佐々木くんも三步でトップスピードに入った。

『走れ、セナ!』香坂直の文章による。

問一 傍線部①「いつもこうだ」とありますが、その内容を示す表現を本文中から六字で抜き出しなさい。

問二 傍線部②「すこしこまったような顔で」とありますが、なぜ「こまったような顔」をしたのですか。説明しなさい。

問三 傍線部③「陸上部をつづけられなくなったの」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア もともと人数が少なかった陸上部の指導教員がいなくなるので、他の部に振り分けたらどうかという意見が先生の間で出たため。
- イ サッカー部の部員と陸上部の部員がぶつかるといふ事故を起こして、陸上部を指導する教員がやめなければならなくなったため。
- ウ 陸上部はもとも人数が少なくて、六年生も他の部活に移りたいと言っているので、指導教員がやめざるを得なくなったため。
- エ 陸上部を指導する教員が休みに入り、部を続けるかどうか多数決をとったところ、他の部に移りたいという意見が多く出たため。
- オ 陸上部のほとんどの部員が地元のスポーツチームである「AC宮の坂」で練習をしているので、陸上部の存在が不要になったため。

問四 傍線部④「口のまわりがムズムズする」とありますが、「あたし」はどのような気持ちですか。二十字以内で答えなさい。

問五 傍線部⑤「あたしの耳にわたがつまった」とありますが、このときの心情として不適当なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 大会に出られないことによるショックで、何も聞こえないくらい混乱した。
- イ 先生に裏切られたことにより、周りの話が何も聞こえないくらい動揺した。

ウ 予想した通りのことを言われたので、何も聞こえないくらい悲しくなった。  
エ 先生たちや六年の不公平な扱いに、何も聞こえないくらいの怒りを覚えた。  
オ 思いも寄らない展開に、周りの言葉が何も聞こえないくらい戸惑<sup>とま</sup>っていた。

問六 傍線部⑥「からだのなかで、なにかが爆発した」とありますが、

(1) どのような気持ちを表していますか、説明しなさい。

(2) 他の五年生も同様の思いを抱<sup>いだ</sup>ていることが分かる表現を探し、十五字以内で抜き出しなさい。

問七 空欄 A 〃 E にあてはまる言葉を次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア ガミガミ      イ ガヤガヤ      ウ ピシヤツと      エ ひそひそ      オ ぼかんと

カ あっさり      キ ニヤニヤ

問八 (F) には「あたし」の言葉が入ります。ここでふさわしい表現を十字以内で書きなさい。

問九 この文章の説明として適当なものにはA、不適當なものにはBと答えなさい。

- ア 登場人物を客観的に捉<sup>とら</sup>えて、それぞれの心情をはっきりと書いている。  
イ 主人公の心情や置かれた状況を、会話文以外の部分でも表現している。  
ウ ひらがなを多く使うことで、登場人物の子どもらしさを表現している。  
エ 同じ言葉を繰<sup>く</sup>り返し使い主人公の心情を読者に強調して表現している。  
オ 「ACC宮の坂」の部員と比較<sup>ひかく</sup>し生活の格差をわかりやすく書いている。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

先に、石にも内と外があると云ったけれども、その内側が「自分」で、その外側は自分ではないということ。石自身が知っているとは誰も思わないよね。また、その必要もない。石にとって残されているのは、ただ崩壊していくことだけなんだから、そこに、維持すべき「自分」など存在する必要もないわけだ。ところが生き物の場合、内と外の間でのたえざる物質の交換を通じて維持されていくのは「自分」なのだから、その「自分」というものをなんらかのあたりで当の生き物自身が「知って」いるのでなければ、そもそも何のために・何をめざして・どのような物質を取り込み、排出しなければならぬかが、定まらない。「自分」というものの存在と、それを自分自身が「知っている」ことが、生命の営みにとってなくてはならないものらしいんだ。① 生命の誕生とともに、「自分」なるものもまた生まれた、と云ってよさそうなんだ。

ここで話を人間にかざれば、私たち人間のもとでは「自分」について「知る」ことは、言葉によって行なわれる段階に達している。もちろん、人間もほかの生き物と同じく、言葉以前の次元でも「自分」について「知って」いるわけだけど、言葉を使うことでその「知り」方は独特の発達を上げるにいたったんだ。なによりも言葉を使って考えることで、人間の生活は（つまり生きることは）ほかの生き物にはない段階に達している。自分たちの生活のために何かを発明してそれを使いこなすなどということは（たとえば、いま君が腰掛けてる椅子や、この本を載せている机がそうだ）、ほかの生き物には見られない現象だけど、そのためには言葉を使って考えることがどうしても必要になるだろう。

A この言葉だけど、それはどうやって身につくか知っていますか。

言語能力が人間に生まれつきのものであってほかの生き物にはないことは事実だけど、でも、人間に生まれれば誰でも言葉を使えるようになるかという点、そうではないんだ。いろいろな偶然が重なって狼に育てられた少女が、かつて発見されたことがある。狼のお乳を飲んでその子は育ったのだけれど、その間、彼女が人間の言葉に接することはなかった。その結果、彼女は、ついに言葉をしゃべるようにはならなかったんだ。発見されたあとで、いくら言葉を教えられても、だ。このことは、人間に生まれても、その発達の一定の時期までに言葉によって話しかけられるという経験がないと、人間は言葉を使えるようにはならないことを示している。では、言葉を話しかけてくれるのは誰だろうか。言うまでもなく、君の周りにいるほかの人間たち、B お父さん、お母さんといった身近な他人たちだね。

これは、言葉を使ってものを考える存在である私たち人間にとってなくてはならない環境は、何も先に見た空気や水といった物質ばかり

ではなく、他人もまた、なくてはならないものだということを示している。考えるための言葉は、周囲の他人たちから君にもたらされたものであり、それ以外のところからではないからだ。酸素を取り入れて二酸化炭素を排出するといった物質のやり取りばかりではなく、言葉をもってやり取りする<sup>②</sup>他人もまた、私たち人間にとってなくてはならない環境なんだ。ここで、<sup>③</sup>言葉と人間の間を考えると、先ほど例に出した箱とボールの関係とのちがいがいつそう際立つ<sup>きわた</sup>と思うよ。

箱とボールは切り離すことができたけれども、言葉と人間は切り離すことができない。物質の次元での生き物とその環境も切り離せなかったけれども、生き物がいなくても空気は空気だという意味では、環境のほうは生き物とは切り離しても存在すると言えそうだ（その逆、つまり生き物のほうは環境から切り離すことはできないけれども）。C、人間とその環境をなす言葉は、どちらも一方なしに他方はない。言葉をしゃべる人間がいなくなってしまうば、言葉自身もなくなってしまうからだ。現に少数民族の言葉で、それをしゃべる人がいなくなってしまうために消滅<sup>しょうめつ</sup>してしまった言語が多数あったことが知られているよ。逆に、先の狼少女のように、ついに言葉を話すことがなかった存在は、かぎりなく動物に近い存在にとどまらざるをえなかった。D、言葉を使ってものを考える存在である人間の次元では、人間とその環境をなす言葉との関係は、物質の次元でのそれよりもっと密接で、もはやいかにしても切り離すことができないレベルに達しているんだ。

以上から、人間という生き物にとつての環境は、物質という自然の次元と、言葉という精神の次元（言葉を使って考えるのが精神だ）、この二つの次元にわたって、なくてはならないものであることがわかったと思う。したがって、もし「環境への配慮」ということを言うのであれば、それは私たちを物質のレベルで養ってくれる自然に対してと、精神のレベルで養ってくれる他人に対してとの、二つの次元でなされなければならないことになるはずだ。

（『中学生の君におくる哲学』斎藤慶典の文章による）

（注1）先ほど例に出した箱とボールの関係：箱の中にボールがある。そのボールにとって箱は環境だと言えるが、両者は無関係で、箱からボールを取り出してもボールという存在に変化はないということが本文より前に説明されている。

問一 空欄 A  B  C  D  に入る語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり      イ ところで      ウ たとえば      エ さらに      オ ところが

問二 波線部「らしい」と同じ働きのものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア お礼を言われてよほどうれしかったらしい。

イ 先に準備をしておくなんて彼女らしい。

ウ 母親は私に女らしくしなさいと言った。

エ ようやく春らしい天気になった。

オ 彼に意地悪されてにくたらしいと思った。

問三 本文中で説明されている「石」の説明に当たるものにはA、「生き物」の説明に当たるものにはB、どちらにも当てはまらないものはCを答えなさい。

ア 「自分」という意識を持たない。

イ どのような環境の変化にも順応する。

ウ 身近なものとの関係を持っている。

エ 「自分」をなんらかのかたちで知っている。

オ 環境と切り離しても存続が可能である。

問四 傍線部①「生命の誕生とともに、『自分』なるものもまた生まれた」とありますが、それはどのようなところからわかりますか、説明しなさい。

問五 傍線部②「他人もまた、私たち人間にとってなくてはならない環境なんだ」と筆者が考えるのはなぜですか、四十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部③「言葉と人間の関係」とありますが、本文中での説明として、最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 人間は言葉を習得することで生き物として生きていける。
- イ 言葉は物質的な環境と違い人間との関係が失われれば存続できない。
- ウ 人間同士は言葉がなくても心を通い合わせることが出来る。
- エ 人間は生まれると自然に言葉と話せるようになる。
- オ 言葉は酸素などと同じように人間にとって不可欠の環境だ。

問七 筆者は人間が考えなくてはいけない「環境」を大きく分けて、二点挙げています。その二点を本文中からそれぞれ十五字以内で答えなさい。

問八 本文の特徴を説明したものとして不適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 生き物や人間にとつての環境を、具体例を出しながらわかりやすく説明している。
- イ 読者に語りかけるような表現で書き、文章に親しみやすくしている。
- ウ 身近な話題を取り上げて、環境に関する常識をくつがえすような説明をしている。
- エ 物質と生き物、そして人間との違いについて段階をふんで説明している。
- オ 環境という言葉が人間にとつてどのような意味を持つかを丁寧ていねいに説明している。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 練習をして記録をチヂめる。
- ② タイボウの夏休みがやってきた。
- ③ 夫婦でクラクをともにする。
- ④ リコ的なふるまいを避ける。
- ⑤ 人々の前でベンゼツをふるう。

